

2025 年 5 月 4 日 復活節第 3 主日礼拝メッセージ

「それでも生きる」

牛田匡牧師

聖書 列王記 上 17章 8-24 節

先日5月1日、また痛ましい事件が起きました。すでにニュースでもたくさん報じられていますが、お昼下がりの時間に、大阪市内で下校途中の小学生たちに向かって自動車が突っ込み、何人もの児童が重軽傷を負ったという事件です。その車を運転していた容疑者は、まだ 20 代の若者だったそうで、警察の調べに対して、「全てが嫌になったから、人を殺そうとして、乗っていた車で突っ込み、数人の小学生をひき殺そうとした」と語ったのだそうです。東京に住んでいる人のようですが、彼は何のために大阪に来たのか、大阪で何かひどくショックを受けるようなことがあったのか。詳細は分かりません。しかし、犯行の動機が、報じられている通り、本当に「全てが嫌になったから、人を殺そうとした」であったならば、何故彼はそこまで追い詰められ、絶望し、自暴自棄になったのでしょうか。しかも、小さな子どもたちが歩いている所を、あえて自動車で狙ったというのは、「標的として自分よりも小さくて力の弱い存在を選んだ」ということでもありますから、何が彼をそのようにさせたのか、ということをおぼろげには思いますが、はっきりとは分かりません。

このような無差別殺傷事件が起こるたびに、「犯人はとんでもない悪人で、善良な一般市民からしたら全く考えられない犯罪だ」と理解されることが多いかもしれませんが、しかし、本当にそうでしょうか。生まれながらに犯罪や殺人を犯す人はいません。また「全てが嫌になったから、誰がどうなってもいい。自分の命も他人の命もどうなってもいい」と語るような、いわゆる「無敵の人」と呼ばれるような全てに絶望した状態、自分自身にも存在や命の意義を見出せず、他人にもそれらを見出せない程に空虚な存在が創り出されてしまった背景には、長い時間をかけた、また深い傷と闇があるのではないかと想像します。

もしも、それらの人たちが犯行に及ぶ前に、また絶望し、思い詰める所まで追い詰められてしまう前に、誰か相談できる人が傍にいれば、話に耳を傾けて聴いてくれる人が近くにいれば、このような事態には至らなかったかもしれません。あくまでも可能性の話でしかありませんが、しかし、それでもこのような痛ましい事件を、少しでも減らして無くしていくためには、原因の追究や対策について、社会全体の課題として真剣に考えていく必要があるのではないかと思います。

少子高齢化が進み、働く人たちの人数が減り、またロボットや AI が日々に発展してくる中で、ここ数年の間に、急にスーパーマーケットでも、飲食店でも、店員さんと会話することなく、お客さんが自分で精算したり、自分で注文したりする形式が増えてきました。コロナ禍が始まった時に「感染リスクを軽減するために、対面

での接触をできるだけ避けるように」と言われていたことも、その流れに拍車をかけたような気がします。その結果として急速に失われているのが、人と人とのコミュニケーションです。今後さらに人口は減少していき、ロボットや AI の利用が広がっていくと、より広く様々な仕事もロボットや AI がこなしていくようになるでしょう。そうなっていった時に、人間が取り組むべきことは何かというと、それこそ新しいものを創り出す創造（想像）と、コミュニケーションではないか、と言われています。

もちろん、今も日進月歩のスピードで進化している AI も、昨今話題となっている「生成 AI」などは、「〇〇について調べてください。説明してください。教えてください」と命令すると、かなりの的確な回答やアドバイスをくれたりしますから、遠くない将来には、病気を診断する医師や、相談に応じるカウンセラーや専門職種にも AI が登場するかもしれません。しかし、AI はいわゆる教科書的な回答をすることはできても、相手の気持ちに寄り添ったコミュニケーション、自分と相手との共感や共鳴を伴ったコミュニケーションは人間同士にしか出来ないのではないかと思います。

私たちは心身に痛みを感じることもあれば、疲れを覚えることもありますし、無理を続けると怪我や病気にもなるような弱い生身の人間です。しかし、その一方で自分が心地よいと思うことをしたり、心許せる相手と共に過ごしたりすると元気になります。目の前の課題や事態の深刻さは変わっていても、自分の話を聴いてもらったりして、自分の存在が受け入れてもらえている、認めてもらえていると感じられた時には、自分の中の不安が小さくなり、安心感が生まれてくる。元気が出てきて、希望が持てるようになってくる……。そういうことが、確かにあるのではないのでしょうか。そして、それこそが人間ならではの、人間らしさ。コミュニケーションに基づく、本当の「癒し」であり、「回復」「希望」なのではないではないかと思えます。

さて、今回の預言者エリヤによる2つの奇跡物語も、そのようなコミュニケーションに基づくお話として理解することが出来るのではないかと思います。時代は紀元前 9 世紀の古代イスラエルです。今から 2500 年ほど昔の人々が、更に遡ること 400 年前くらいの人々や社会のことを、長年口から口へと語り継がれてきていた物語として書き記したものです。前半はその日の食料にも事欠く貧しいやもめの親子の「小麦粉と油が尽きない」というお話で、後半は「子どもを生き返らせる」というお話でした。

お話の舞台は「シドンのサレプタ」です。イエス様たちがおられたガリラヤ湖から更に北西、地中海沿岸にある異邦人の町でした。その頃、イスラエルに大旱魃^{かんばつ}が起り、ヨルダン川の東にいたエリヤの所では、水が涸れてしまいました。そんな時、

彼に主の言葉が臨みました。8 節です。「すぐにシドンのサレプタへ行って、そこに身を寄せなさい。私はそこで一人のやもめに命じて、あなたを養わせる」。そしてエリヤがサレプタの町へ行くと、そこで薪を拾っている一人のやもめに会いました。夫に先立たれたやもめは、特別な服を着て(創世記 38:14)、飾らず、粗末な衣をまとい、髪を整えず、香油を塗らなかった(ユデイト 10:3-4、16:8) そうですから、エリヤから見ても、一目で「やもめ」だと分かったのでしょう。

ヨルダン川の東からはるばる旅をして来たエリヤは、空腹で喉も乾いていましたから、エリヤはその女性に「私に水を飲ませてください」「パンも一切れ下さい」と声をかけました。しかし、貧しいやもめは「私には、焼いたパンなどありません。かめの中に一握りの小麦粉と、瓶に少しの油があるだけです。……これから私と息子のために調理するところです。それを食べてしまえば、あとは死ぬばかりです」と答えました。そう答えた時の、彼女の絶望はどれ程のものだったのでしょうか。しかし、そんな彼女に対して、エリヤは「心配は要りません。帰って行き、あなたが言ったとおりに調理しなさい。だが、まずそれで、私のために小さなパン菓子を作り、私に持って来なさい。その後で、あなたと息子のために作りなさい。なぜなら、イスラエルの神、主はこう言われるからです。『主がこの地に雨を降らせる日まで、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることはない』」と言いました。

彼女は「これから最後の食事を作ろう。そしてそれを食べたなら死を待つのみ」という絶望のただ中にいました。どこぞの誰かも分からないエリヤを無視することも、またその要求を断ることも出来ました。「私たちにはこれしかありませんから、あなたにはあげられません」「『小麦粉が尽きず、油がなくなることはない』なんて、有り得るわけないでしょう。現に今、こうして無くなろうとしています。これまでも何度も空っぽになってきました」と言えたはずです。にも拘らず、彼女はエリヤの言う通りにして、自分たちが食べるよりも先に、エリヤにパン菓子を差し出しました。もうこれしかない、これを食べたなら終わり、という極限状態の中で、他人に食べ物を分け与える。文字通りの「命の糧」を分け与えるということを、どれだけの人が出来るのでしょうか。そして、この女性は最後の一握りを、エリヤにも分け与えたことを通して、その後も親子共々、エリヤと共に命を得ることが出来ました。

後半のお話も不思議です。この女性は、子どもが病気になって死んでしまったことを、かめの小麦粉と瓶の油を尽きないようにさせてくれた命の恩人であるエリヤのせいにして、エリヤを責め立てています。「神の人、あなたは私と何の関わりがあるというのですか。あなたは私の過ちを思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか」(18)というのは、まるで「あなたが来なければ、私の息子は死ななかったに違いない」とでも言いたげです。しかし、前半のお話を思い返せば、

エリヤと出会わなくても、この親子は食べるものがなく、もう死を待つのみでしたから、この言葉は彼女の言いがかりに過ぎません。すると彼女は、「恩知らずな大変失礼な人」ということなのでしょう。

この二つの物語を読む時、私は預言者エリヤもまたこの親子と同じく、飢えて死の間際に瀕しており、また神に対しても人に対しても、決してゆとりがあったわけではなかった、ということに注目したいと思います。神の言葉に従ったエリヤとはいえ、彼もまた飢えていて、他人からパンを与えてもらえなければ死んでしまいそうな身でした。町の入り口で彼女に声をかけた時、彼女に無視されたり、断られたりしたら、生きていなかったでしょう。また彼女の子どもが病気になってしまった時にも、彼は彼女の家に住候していたわけですし、当然母親と一緒に様々な看病もしたり、お祈りもしたりしたでしょうが、八方手を尽くしても、その子は死んでしまいました。拳句に彼女からも文句を言われてしまう。それこそ「私のせいじゃない」と言い返したくもなかったのではないかと思いますし、また黙ってその家を出て行って、別の所へも行きたくなかったかのではないかと思います。しかし、エリヤはその子どもの遺体を抱いて、神に叫びました。匙を投げることもできた、諦めることも無視することもできた。にも拘わらず、彼は彼女や神と向き合うことを選びました。その結果、子どもは生き返ったと伝えられています。

これらのお話から私たちが受け取るのは、たとえ先行きの見えない、絶望としか思えないような中であっても、「それでも生きる」ということ。孤独に留まらずに、他人と関わり続ける、神と関わり続ける。たとえ文句や嘆き、言葉にならない呻きであっても、コミュニケーションを続ける中で、新しい気づきが与えられることがある。新しい目覚めがある、新しく生き直せることがあり得る、ということではないかと思います。

人と関わり続ける、ということは、大変面倒くさいことでもあります。長年一緒に暮らしている家族であっても夫婦であっても親子であっても、それぞれに言っていることがすれ違って噛み合っていなかったり、誤解し合ったりすることも少なくありません。また親密な関係はいつの間にか対等性を欠いて、抑圧的なハラスメントの関係性になってしまうこともあります。けれども、人間は他者との関係性を外れては生きていくことが出来ません。神は人間を一人で生きる者としては作られませんでした（創世記 2:18）。私たちは今日も神様から命を与えられて生かされている者として、たとえ困難や絶望の中にあっても、神と共にありながら、また周りの人たちとも共にあって、それでも生かされて参ります。